連載

元中央大学職員の――世界放浪 4

石井誠啓 Ishii Masayoshi
（1997年中央大学経済学部卒。97―2001年中央大学職員）

アフリカ大陸縦断記

世界一周が終わった。

ヨーロッパ、中近東、アフリカ、アジア、中南米と文字通り数えきれないくらいバスや列車に乗って移動した。地球は広いんだって実感した。そんな中で、もっともきつかったところといえばアフリカ、特にスーダンからケニアまでの移動だ。もう1回陸路で抜けたいかと問われれば、飛行機のチケットはいくらかな？なんて調べてしまうかも。でも、そこを経験したおかげで、多少移動時間が長くとも、道が悪くとも、あのときに比べればって思えたもの。きつかったからこそ印象にも残る。やったんだという気持ちはそういうときの方が大きい。

ナイル川を上る

エジプトのカイロから列車で南下する。ルクソールやアスワンを観光したあと、ナイル川を上るフェリーに乗った。フェリーは客船というより貨物船で乗客と荷物でごったがえす。船が沈むんじゃないのっていうくらい大量の荷物が詰め込まれていく。船内は満員なので、寝るときは床に新聞をひいて寝た。寝心地最悪だが文句は言えない。アフリカの旅は始まったんだ。

翌日、甲板に出てみると、多くの人々がメッカの方向に向かってお祈りしている。イスラム諸国を旅していていれば見慣れた光景だ。たとえどこにいても祈りを欠かさないその姿に毎度感心させられる。

船はナイル川をひたすら上っていき、乗船から丸1日後、スーダンの港町ワディハルファに到着。いや、町とは呼べないほど、何もなくて殺風景。地面にいっさいのアスファルトはなく、荒涼とした砂地に少しばかりの建物があるだけ。このときほど、「あーアフリカに来たんだ」と実感したことはない。もちろんエジプトもアフリカ大陸の一部ではあるが、観光地化された国という感じで、僕がイメージするアフリカではなかった。人種もスーダンからがいわゆるブラックアフリカで黒人になる。

悪路のバス乗車率200％

翌日、列車で移動しようかと駅に行ったら、昨日到着してるはずの列車がお昼を過ぎてもまだ到着していない。というわけで、ドンゴラという町へドイツ人2人、デンマーク人2人と一緒にバスで行くことになった。このバスがひどかった。船同様、荷物と人でぎっしり。席は2人用の席に3人も座らされるから、きついのなんの。どういう設計でつくられたのか前の席との間隔がおそろしく狭い。左側にはでかいスーダン人の兄ちゃん、右側のスーダン人ねーちゃんは狭いっていう視線をぶつけてくるが、僕のせいじゃなーい。押し合いへしあい合戦スタート！乗った瞬間にくじけそうになった。

通路にも人と荷物なんて当たり前。乗車率200％だね。おまけに道路は悪路。およそ道と呼べるものはなく、ただ砂の上を走っていく。常にガタガタ揺れる。体が浮き上がるく

らい揺れることもある。遊園地のアトラクションじゃないんだから……。体が浮いたときに、突き出たところにぶつかって数針縫う羽目になった日本人もいる。その揺れは楽しめない。バスには「窓枠」はあるが、「窓ガラス」がない。砂ぼこりが普通に入ってくる。バスは走れども走れどもいつ到着するのやら。運転手にいつ着くのか聞いてもおなじみの「インシャッラー！（アラーの神の御心のままに）」。ドイツ人クラウスがこの状況を笑いながら「ウェルカム トゥ アフリカ」って。笑えないっつうの。

途中、休憩で止まるとスーダン人の男たちがいっせいに散らばり、座っている。何してるのかなって思ったら、座り小便じゃん。そっか、服装が長いスカートみたいのだから、そうなるわけね。広大な砂地に座り小便の男たち。絵になるねえー。

バスは夜中の2時に突然、何もない砂地の真ん中で止まってしまった。どうやら朝までお休みタイム。でも、宿なし、寝袋なしでどうやってこの寒さの中、寝りゃいいんだ？　昼間は暑いが夜は極端に冷える。窓ガラスはないから、外にいるのと変わらない。現地の人は毛布やなんやら持って外に寝転がる。僕は着れるものはすべて身につけて朝を迎えたが、夜明け前はどうしても寒さで眠れず、太陽が待ち遠しくて仕方なかった。

砂漠をジープで移動中（スーダン）

朝になってもひたすら走り続け、ようやくカルマという村に到着した。そこで小さいトラックに乗り換える。さらにまた走るが、窓枠すらないトラックの荷台は砂を思いっきり浴びる。必殺砂シャワー。体中の細胞のすみずみまで砂にまみれた。砂シャンプーで髪の毛もカサカサだ。

トラックはスタートしてすぐパンクした。そのあと5分もしないうちにまたパンク。それからもう1回……。はぁー。1度は砂にはまってトラックが動かなくなり、みんなで押し出した。ああーなんかアフリカっぽい。ようやく目的地ドンゴラに着いたのは18時。昨日の午後から、26時間移動したことになる。地図で確認してみると、それでも大してすんでない。スーダンはアフリカ一大きな国。

ドンゴラからカリマへのドライブは最高だった。生涯ベスト3に入る印象的な景色といってもいい。目に入ってくるのは広大な砂地だけ。他に何もなし。本当に何もない。ただ、360度地平線が見える。人工的なものはもちろん、草木の1本すらない。地球上って気がしない。道なんてなく、車のわだちが幾重にも重なっていて、その上をなぞっていく。それがなければ方向感覚を失いそうだ。まるで違う惑星にやってきた調査隊の気分だった。

友好的なスーダン人

首都カルツームへの移動はスーダンに入国して以来のまともなバスだったし、途中からは舗装道路だったので快適な移動だった。カルツームに着くと、カリマの宿で出会ったスーダン人ターリタが家に招待してくれ、食事をごちそうしてくれた。彼の家族が温かく迎えてくれる。彼らは日本車は性能がいいってほめまくる。それと数年前は日本のドラマ「おしん」が人気だったって。タクシー代もだしてくれ、宿を探すのも手伝ってくれた。宿代まで出してくれるっていうのを必死に断った。

スーダン人はみんな親切だ。友好的なのに別にうっとおしいってことはなく、距離感がいい。気質はおだ

やか。喧嘩してるのもみないし、テレビでサッカー見ててもエキサイトしない。だから、カルツームは首都で人が多いのにもかかわらず、意外と静か。エジプトの町はうるさかったし、喧嘩もよく見かけた。スーダンはエジプトと違いぼったくりの心配なく買い物ができる。飯は右手で食べる。左手はお尻を拭くトイレ用。アラブ諸国はどこでもそうだが、トイレットペーパーを使わない。これは最初は抵抗あるが、慣れるとなんともない。洋式トイレでは無理だけど、和式トイレでお尻を拭く水さえあれば今だってできる！

スーダンの西部、南部は常に紛争状態で旅行者が立ち寄れる状況ではないが、エジプトから入国し、エチオピアに向かうルートに関しては治安はまったく問題なかった（注意その当時＝04年＝はということです）。スーダンは観光的な見所こそ乏しいものの人が魅力的だったな。

エチオピアのケンドゥ少年

エチオピアへの入国はスムーズで、国境の町メテマからシャディへ移動した。到着した途端に寄ってくる子供たち。みんな「YOU！」「YOU！」って言ってくる。それしか英語を知らないらしい。最初はかわいいなあって思っていても、一歩ごとにいろんな方向からユーユー言われるとだんだんイラついてくる。ちゃんと「HELLO」って言いなさい。まあ、かわいいから許すけどね。

エチオピアでは早起きしないと移動ができない。まだ真っ暗な朝5時、バスターミナルのゲートが開き、人々がなだれこむ。ときには何百人という人々の壮絶な席の取り合い。これに参加するのがめんどくさかった。バスは朝のこの1本だけ。夜行バスはない。シートは硬くて狭いので、長時間座ってると腰が痛くなってくる。車内の窓を開けることは許されない。どんなに暑かろうと、誰かが吐いて、においていようとだ。なぜならエチオピアの人々は外の空気と中の空気が混じると悪い空気が生じ、それが体に害を及ぼすと信じているから。

小学校を訪問したら大歓迎――「私も撮って、私も！私も！」（エチオピア）

エチオピア北部は標高が高いので、高原地帯の山や緑が美しい。スーダンがカラッカラだったので対照的だ。でも、干上がってる川が多く、水が不足しているようにも見えた。道路は未舗装なのでバスはゆっくりとしか走らない。

シャディから標高2200メートルの町ゴンダールへ。着いた途端に、宿を探してるのかって言い寄ってきた少年がいて、僕は警戒していたから冷たくあしらってしまったんだ。あとで知ったんだけど、彼は母親を亡くし、最近父親をマラリアで亡くし、ストリートチルドレンになった。昼間は靴磨きで生計をたて、夜は学校に通っている。その授業料を援助しているという日本人大学院生が15歳のこの少年ケンドゥのことを教えてくれた。知らなかったとはいえ、彼に対する自分の態度が恥ずかしかった。エチオピアはスーダンに比べたら、あまり人がいいという評判を聞かず、用心深くなっていた。ケンドゥは僕に安宿を紹介してくれたが、一銭もこびなかった。ただの親切だったんだ。

この町に研究に来ている日本人の大学院生は2人いて、エチオピアのことを教えてくれた。ここゴンダールは人口18万5000人のうち、5000人がストリートチルドレン。エチオピアは1日2ドル以下で生活してる人が人口の98％、1ドル以下

では85％。また田舎ではロバや牛との獣姦が普通という。実際にそのへんのエチオピア人男性に聞いたら、みな経験者で僕はあぜんとなった。ちょっと想像できない。

次に移動したラリベラはエチオピア随一の観光地で2万人もの人々が24年かけて岩をくりぬいてできた教会群が有名だ。エチオピア正教はキリスト教だが教会にはキリスト像などのたぐいはない。ご神体はアークだ。アークとはモーゼの十戒を記した石版で、伝説ではエチオピアにあるとされている。

宿のオーナーがコーヒーセレモニーに招待してくれた。コーヒーを豆から煎って、砕き、お湯に入れて3回に分けて飲むエチオピア固有の儀式。このコーヒーセレモニーでできたコーヒーはめちゃくちゃうまい！　さすがコーヒー発祥の国。エチオピア南西部のカファ州で生まれたのがカフェ、コーヒーになったんだとさ。

ラリベラから2日間続けて一日中バスに乗った末、首都のアジスアベバ（標高２４００ｍは首都として世界第3位）に着いた。数日間にわたる早起きと長時間移動のせいか、体調壊し気味でアジスアベバでは1週間動けなかった。風邪か高山病なのかわからんが、とにかく体に力が入らなかった。

めしで栄養をとろうにも、僕はエチオピアの主食インジェラが好きでないし、飽きていた。インジェラは発酵させたクレープ状のものに肉や野菜をつまんで食べる。どこにいってもこればっかし。インジェラ大好きって人もいたけど僕には合わなかった。エチオピアはリベリアと並びアフリカで唯一植民地化されなかった国だが、イタリア占領下だったことがあり、ピザやスパゲッティが今に残っている。が、イタリアで食べるものとは似ても似つかない。

ぜいたくをいってはいけないが、アジアに比べるとアフリカの食はぐっと落ちる。僕は旅において食にはこだわらず、食べられればいいやってタイプだけど、このインジェラやケニアのウガリは苦手だった。ちなみに食がうまいと思った国はベトナムと中国。毎回の食事が楽しみだった。

ケニアへ　無法大型トラックの旅

アジスアベバのマザーテレサの施設でボランティアしたあと、ケニアに向けて出発した。国境の町モヤレまでは2日がかりだったが、道路が舗装されていてラクだった。舗装されているかいないかは体力および精神力の消耗に大きくかかわってくる。エチオピア南部は標高が下がるので暑い。僕は時間がなくて行かなかったが、この地域は多種多様な民族の宝庫で、訪れる旅行者も多い。

こんなファミリーも無法トラックに同乗（ケニア）

ケニア入国後、ワジールへもうすぐ出発するという大型トラック（通称ローリー）に飛び乗った。これがあとで知ったが最悪の選択だった。次の日に出発するというバスを待つべきだったとのちに後悔することになる。

トラックの荷台には多くのケニア人、敷詰められた豆袋、巨大なスペアタイヤがごっちゃになっている。狭くて暑苦しく、道が悪いため揺れに揺れる。すきまから空が見える意外は何も見えない。頭から足の先まで砂ぼこりで真っ黒になり、僕の白いTシャツは茶色いシャツへと変わった。パンク、故障は当たり前で普通に3時間立ち往生することもあった。いつ着くんだろう？　時間の経過すら感じない荷台で豆袋とスペアタイヤに横たわりながら、ぼーっとしてくる思考。朝出発したトラックは止まったり走ったりを繰り返しながら、夜になっても

走り続けた。真っ暗な闇の世界。闇と一体化するケニア人。

揺れてる状況の中でも寝たり起きたりしてたら、「着いたぞ」って起こされる。時計を見たら夜中の零時。こんな時間にどうしろっていうんだ？　宿がどこにあるかもわからないし、そんな時間に歩き回るのも嫌だった。防衛本能が、知らないところでポツンと降ろされるより、トラックに乗っていたほうがマシだとささやく。よく聞くと、このトラックはナイロビまで行くというので乗り続けることにした。しかし、この決断も間違いだったとあとで気づくことになる。

夜通し走ると聞いていたのに、トラックはすぐに故障して止まった。そのまま夜明けまで道の真ん中に止まっていた。疲れから眠りに落ちた。朝になり、ようやく修理を始める。いつ走り出すか到着するかなんてわかったもんじゃない。確かなのは南へ、ナイロビへ向かっているということ。無理な姿勢で寝たため体中が痛い。

マサイ族の女性。スラリとして美しい（ケニア、ナイロビ郊外）

朝食のため途中の村で休憩した。食べ終わってトラックに戻ろうとしたら、乗る前に走り出していってしまった。は？　置き去り？　他の乗客もまだ乗っていないし、意味わからん。みんなで一緒にトラックが走り去った方角へ歩き出す。15分も歩いたところでやっと発見した。暑い中歩かされてむかついていた僕は、「なんで先に行ったんだ？」と運転手に聞く。「このトラックは乗客を乗せてはいけないんだ。警官のチェックを避けるために町を出たんだ」。おいおい、そういうことは早く言えよな、っていうか乗る前に言うのが普通だろ。もうここまで来たら、他の手段がないので乗っていくしかない。

荷台の上にある棒の上に座って景色を眺める。他の乗客がやってるのでマネしてみた。果てしなく続くサバンナの景色。だが、景色に集中できないくらいケツが痛い。棒の上はバランスが悪い。ケニア人は慣れてるようだ。豆袋やスペアタイヤが一緒とはいえ、荷台に座るスペースがあって本当によかった。もしこれが牛を運ぶトラックだったら、乗客が座るスペースはなく、その棒の上に何十時間も乗ってなくてはならない。想像しただけで発狂する。後日それをやったという日本人に会ったが、僕は心から尊敬します。

マサイマウ国立公園　キリンの群れ性（ケニア）

見渡す限りの平原に高い木は見当たらない。低い木だけがポツポツ散らばっている。野生動物が見れるかと期待してたら、豆粒くらいの大きさでしか見えないキリンの親子を発見した。ケニア人に言われなきゃわからないくらいの遠さだ。彼らはいったいどういう目をしてるんだろう。

棒の上にいるとまだ風があたるが、荷台に戻ると灼熱地獄で気が遠くなる。スペアタイヤが揺れるたびにその砂ぼこりをまきちらし、息苦しくさせ、跳ね上がると人を押しつぶしそうだ。全身にまみれた砂は不快度１２０％。立ち寄った村には冷たい飲み物が存在しなかったりする。電気がないのだ。冷たい1本のジュースがあれば、どれだけ癒されることか。この状況に心の底からきついな

あと思った。スーダン、エチオピアの移動を思い出し、あれはまだマシだったと振り返る。日が暮れ、夜がまたやってくるといっそう打ちのめされる。

夜9時ごろ、突然トラックは警察に止められた。全員降ろされ、列になって座らされる。その場に緊張感が漂っているのがわかる。僕ともう1人の日本人は唯一の外国人。次々とやってくる警察官がパスポートの提示を求める。1人は「おまえらは法律を破った。日本では違法車に乗ってもいいのか？」と責めたてる。僕は必死に説明する。「僕らはただの旅行者だ。国境で言われたように料金を払って、トラックに乗っただけだ。違法車なんて知らなかった」。そう、あのときケニアに入国したばかりの僕らがこの国の法律なんて知る由もなかった。警官はしきりにこのトラックは荷物専用で人を乗せてはならないという。「逮捕はしない。安心しろ」ってそんなの当たり前だっつうの！　なんでこんな目にあわなきゃいけないんだ？　賄賂を請求されても絶対に払わない気でいた。警官たちは強い調子で他の乗客を尋問したり怒鳴っている。結局20分くらい拘束されたあと、解放され、全員バスに乗った。

国境ではバスを待て

ガリッサという町に着いたのは22時を過ぎていた。国境の町モヤレを出て以来、37時間が経っていた。身も心もボロボロだった。警察にはガリッサからはバスに乗るよう言われていたので、ここでトラックとはお別れ。もうこんなトラック嫌だと思っていたからちょうどいい。ナイロビまでの分払った金をトラックの運転手に返してほしいと要求したところ、返そうとせず踏み倒そうとする。周囲のケニア人も巻きこみ、騒ぎ立てた末、ようやく返してくれた。ふざけるな！もともと違法だと知っていながら、お金欲しさのために僕らを巻き込んだくせに。

見つけた宿にはシャワーがなかったが、それでも水で体の砂を落としたら、いくぶんすっきりした。粗末ではあったが、ベッドで寝れるということがこんなに幸せだって感じた日もそうはない。疲れた体が眠りにつくのに数分とかからなかった。

翌朝、ナイロビ行きのバスに乗った。バスは日本のバス並みで広くてきれい。昨日までとは雲泥の差の快適さ。道路は舗装されていて、揺れもないし、砂ぼこりにもまみれない。快適だって何度も口にし、うれしさで顔のゆるみがとまらない。何度も思うが舗装されている道路はすばらしい。道路をつくっている人たちはエライ!!　きょうは冷たい水、ジュース、おかし、果物なんでも手に入る。昨日まではなんだったんだろう？モヤレからナイロビ、生涯忘れられない移動だ。これからアフリカ大陸縦断をするという人には必ず言っている。「国境ではバスを待つこと。絶対に待つこと」

アフリカ最高峰キリマンジャロ登頂。寒さと高山病との戦いだった。左・筆者（タンザニア）

喜望峰に立つ

その後、タンザニア、マラウイ、ジンバブエ、ザンビア、ボツワナ、ナミビア、南アフリカ共和国と順調に移動し、無事、喜望峰に立つことができた。念願のアフリカ大陸縦断達成の瞬間だったのにいまいち感動が少なかった。たぶん後半の移動が比較的ラクだったからだろう。もしスーダンからケニアの移動がずっと続いた先の縦断達成だったら、泣きわめいたかもしれない。喜望峰から海へダイブしていたかもしれない。